自然科学書協会会報
NSPA JAPAN
THE NATURAL SCIENCE PUBLISHERS' ASSOCIATION OF JAPAN
発行人｜金原　優
編　集｜広報委員会

■ 自然科学書協会に期待すること
中央大学理工学部教授　田口善弘
■ 自然科学書フェア2017
■ 役員候補者選挙ご協力のお願い
■ 第66期第3回会員集会・懇親会のご報告ほか

2017.4.20　NO.2　（通算84号）
一般社団法人　自然科学書協会｜〒101-0051　東京都千代田区神田神保町1-101｜神保町101ビル1階｜TEL 03-5577-6301｜http://www.nspa.or.jp/

●自然科学書協会に期待すること●

ピンチをチャンスに

中央大学理工学部教授　田口善弘

○著者略歴
1961年生まれ。東京工業大学大学院理工学研究科博士後期課程修了。理学博士。東京工業大学助手、中央大学助教授を経て現職。主著に『砂時計の七不思議』『高校で教わりたかった物理』等がある。

自然科学書（大学の理工系の教科書・専門書）の出版社にはいろいろ言いたいことがある。まず、売れるからという理由で同じような教科書を次々と出版するのはいかがなものか。志が低いのではと思ってしまう。確かに講義を持っている先生に教科書を書かせれば、少なくとも受講生の人数分は売れるんだろうけど、それって本当にただの商売じゃないか。そんなことしなくても売れる、本当にいい本を作ろうという気概はないのか。

そうこうするうちに外堀はどんどん埋まっていく。いわゆる「成書」の良さとは、効率よく新しい概念を学べることであろう。だが、こんなことがあった。ある理由で僕はテンソル分解というものを勉強したくなった。お前はその年までそんなことを勉強していなかったのかとか、そんなことは学部で勉強することだろう、というツッコミはおいておく。それで、僕は何をしたかというと（図書館に行って本を漁ったり、本屋に行って教科書を物色したりする代わりに）ネットで英語のプレプリントや英語のプレゼン（当然、全部無料）を漁りまくって理解した。それからしばらくして、テンソル分解を解説した日本語の教科書が出た。ネットで某研究大学院の院生が褒めていたので買ってみた。がっかりした。知らない（英語のプレプリや英語のプレゼンを漁っても理解できなかった）ことは何も書いてなかった。もはや、成書を紐解かなくても知識は得られる時代になってしまった。

それはお前が英語に不自由しないからだろう、という向きもあろう。だが、それもまた危うい。昨今の機械翻訳システムの精度の向上はすさまじい。早晩、洋書の教科書がほぼリアルタイムで日本語に翻訳されて売られる時代は来るだろう。そうなったとき、当然、ネットで僕が読み漁ったような英語の情報も無料で日本語化されるようになっていると思うのは、そんなに変なことじゃない。

世界を相手にした英語の文献がほぼノーコストで日本語化されて、洋書の海外での価格が為替レートで変換されただけの値段でほぼリアルタイムで売り出される時代、ネットにいやというほど落ちている無料の英文プレゼンや英文プレプリが即座に日本語に変換されて読める時代、そんな時代が来たとき（それはきっともうすぐだ）、日本の自然科学書（の出版社）は生き残れるのだろうか。僕はマジで心配している。いわゆるCNS*以外はほとんど相手にされていない今の学術雑誌みたいに、自然科学書の出版も、日本発のものはほぼないに等しくなってしまうのじゃないか。本屋に行ったら、僕らが若いころ目にした有名な日本の理系の出版社の本は一冊もなく、エルゼビアとかシュプリンガーとかの本（もちろん、日本語！）しか並んでいない、という未来を想像するのはそんなに難しいことではない。

それどころか、日本の大学教員や研究者に海外の有名教科書出版社から直接コンタクトが来るようになり、「翻訳はこちらでやります、日本語でいいから書いてください、先生の教科書は世界同時発売ですよ！」などとやられたら、そもそも、日本の出版社に教科書を書いてくれる日本人研究者さえ皆無になってしまうかもしれない。

さらに、敵を英語だけだと思うのは浅はかだろう。中国語の教科書がリアルタイムで和書になることだって考えられる。むこうは十倍の人口がいるのだ。規模の経済的に勝ち目があるんだろうか。

日本の自然科学書の出版社がそんな苦境に陥らないために、それでは、どうすればいいだろうか。それは原点に返ることだと思う。自然科学書の目的は、上述のように「効率よく新しい概念を学べること」だろう。だったら、もはや本という〝入れ物〟にこだわる必要はないのではないか。教科書を開く代わりに学生がタブレットPCを開き、質問しながらリ

アルタイムで学習していく、そういうシステムを構築して無料で提供し、広告料金で生き残る、みたいな戦略が必要なのではなかろうか。これであれば、例えば、日本の事情（例：高校で統一されたカリキュラムを学んできた若者が大部分を占める大学）に適応したシステムを作ることで「外（国語）圧」に対抗することも可能だろう（ここで最近報道された、ある科学雑誌をめぐるあるニュースが、当然のように思い起こされることになるだろうが、それはそれ、としておこう）。

いわば、これは〝守り〟の姿勢だが、攻めだって可能だ。洋書がリアルタイムで和書になるということは、逆に和書をリアルタイムで洋書として売り出せる、ということだ。機械翻訳の力を使って和書を準リアルタイムで世界中に電子書籍として売っていく。そんな戦略だって可能だろう（上で危惧したことの逆パターンということだ）。案外それで、世界的なベストセラーが何冊も生まれるかもしれない。いや、むしろ、欧米に乗り込んでいって欧米の研究者・大学教員に英語で教科書を書かせ、日本語に翻訳して売っていく、くらいの意気込みさえ必要かもしれない。

僕は個人的には「本」という物理的な実体が好きだ。だが、そんな郷愁にも似た感情をもつのは僕らが最後の世代だろう。大学生は本を読まないという調査が報道された数日後、本を読まないのは何か悪いんですか、という現役大学生の反論がでた。しかも、なんとあの朝日新聞の声欄に、である（当然、投稿者の実名が明記されている）。そんなことを大学生が実名で全国紙に書いても恥ずかしくもなんともない、時代はもうそこまで来てしまっている。

日本人はかつて、明治維新と同時に多くの外国語の専門用語を日本語に翻訳して、母国語で高等教育まで受けられるようにするという偉業をなしとげた。それがその後の〝奇跡〟ともいえるこの国の発展に大きく資することとなったのは論を待たないだろう。その偉業は当然、当時の「自然科学書の出版社」の陰の力がなかったらできなかったはずだ。いまはあの時と同じような激動の時代のはず。ピンチにつぶされるかチャンスをつかめるか、それはまさに、「自然科学書の出版社」の頑張りにかかっている。

僕の孫の世代が大学生になったとき「昔は日本にも理系の出版社があったんだよ」と僕が言い、孫の世代が「えっ」と驚く、そんな未来を僕は経験したくない。そんな未来が来ないために皆さんの大奮起を期待します。よろしくお願いいたします。

＊“Cell”“Nature”“Science”という理系の学術三大雑誌の総称で、引用数の多い（いい研究、とまでは言わない）論文をたくさん集めている。

自然科学書協会講演会二〇一七のご案内

自然科学書協会創立七〇周年を記念して、来る五月一三日（土）、自然科学書協会講演会二〇一七を左記のように開催いたします。

記

日時：五月一三日（土）　一四時三〇分～一六時（開場一四時）
会場：日本出版クラブ会館　鳳凰の間（東京都新宿区袋町6）
講師：柳田邦男（ノンフィクション作家、評論家）
テーマ：「文学としての科学書」
定員：一五〇名（申込みは締切ました）

【講演趣旨】

現代の人間は、否応なしに科学技術の成果を取り入れた生活用具や通信機器や交通機関や社会システムの中で生活し、仕事をしている。人間を描く文学でさえ、そういう科学技術の知識や論理的思考から逃げてはいられない。私が一九七一年に発表した『マッハの恐怖』は、ノンフィクション・ジャンルあるいは記録文学のジャンルにおいて、そういう意識を前面に出して書いた作品だった。

一方、伝統的な科学啓蒙書や科学者の伝記作品においては、科学の理論や技術の理論についての解説的要素が物語的に語られることで、若者や一般読者の興味を引いてきたが、科学・技術の急速な進歩によって、分子生物学や遺伝子研究や高度なコンピュータ技術などの先端的な科学・技術について、若者や一般読者が知的興奮を覚えるようなドラマ性を持った叙述をすることが、容易ではなくなっている。それは、科学・技術の啓蒙書の分野における課題になっていると言えるだろう。

もう一つ、科学者が書くエッセイというジャンルがある。往年の物理学者・寺田寅彦は、エッセイの名文家として、そのエッセイ集は今でも読み継がれているが、生命の操作や宇宙の謎など最先端の科学研究に挑んでいる現代の科学者たちが、人間や時代や研究の未来などについて、どのように考えているのか、エッセイスタイルで書いてほしいものだ。

まさに科学技術文明の真っ只中にいる今こそ、科学書のジャンルに期待される多岐にわたる課題に、出版界は新機軸を打ち出してほしい。

以上のような問題意識について、私が親しんできた科学・技術の分野の本を引用しつつ、語ってみたい。

柳田邦男（やなぎだくにお）
1936年生まれ。東京大学経済学部卒業。NHK記者を経て作家活動に入る。

自然科学書フェア二〇一七

今年の自然科学書フェアは、高知県高知市にある金高堂書店本店にて五月二七日（土）から六月二二日（木）まで開催し、会場を移して、金高堂書店朝倉ブックセンターにて六月二四日（土）から七月二三日（日）まで、約二か月間の開催となります。

金高堂書店本店は、高知城の東側に位置する帯屋町二丁目商店街にできた複合施設「帯屋町チェントロ」に、旧本店から二〇一五年八月に移転オープンし、床面積約一九〇坪、在庫冊数約一二万冊を有する、こだわりの書棚作りで高知市の読者を楽しませている書店です。

今回のフェアテーマは、会員各社おすすめの書籍を一点一冊集め展示販売する「自然科学書一〇〇〇冊フェア」としました。「一」は始まりの数。読者と書籍との出会いが興味の始まりとなるようにとの思いを込めて「一」にこだわり、会員各社から厳選された「一〇〇〇冊」をフェア会場に展開します。また、一点一冊の展示となるので、棚補充の間の空白期間を補うため書影を掲載したフェア目録を作成します。フェア目録は店内での配布はもちろん、外商部門を通じて大学や専門学校の学生・司書に向けて配布される予定となっています。

さらに、会期後半の金高堂書店朝倉ブックセンターでは、店内に『自然科学書通り』と銘打って、購買動線上にワゴンやテーブルを使った新しい取組みの展示販売を行う予定です。

会期中、機会がございましたら是非フェア会場に足をお運びいただきますようお願い申し上げます。

（販売・出展委員会　御園英伸）

自然科学書フェア 2017 を開催する金高堂書店本店のフェア台。両面を使って展開される。

東京国際ブックフェア二〇一七開催見送りについて

二四回目となる「東京国際ブックフェア（TIBF）」は、二〇一七年の開催が見送られることとなりました。三月一日に主催者より発表され、二〇一八年九月の開催を目指して進められるとのことです。

販売・出展委員会としましては、本年は見送られたものの、来年は開催されるものとして準備は進めていく所存です。二〇一八年の開催が決まりましたらご案内させていただきますので、会員各社におかれましてはご協力のほどお願い申し上げます。

（販売・出展委員長　池田和博）

役員候補者選挙ご協力のお願い

第六七および六八期の役員（理事・監事）候補者選挙に伴い、選挙管理委員会が設置され、選挙管理委員長を拝命いたしました。委員である朝倉理事（朝倉書店）と梅澤理事（日本医事新報社）の三名で公明正大な選挙を実施してまいります。

選挙の日程につきましては左記を予定しております。会員各社の代表者の皆様におかれましては、選挙へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

四月二五日　代表者名簿確認文書送付
五月　八日　代表者名簿確認締切
五月一九日　投票用紙の送付
六月　二日　投票締切
六月　八日　開票
六月一五日　定例理事会において理事・監事候補者の発表
七月二〇日　定時総会において理事・監事の選任の後、新理事による臨時理事会にて新理事長の選出

（選挙管理委員長　池田和博）

自然科学書協会七〇年史のご案内

一般社団法人 自然科学書協会は昨年（二〇一六）創立七〇周年を迎え、それを記念して「自然科学書協会七〇年史（六〇年史追録版）」を発行いたしました。当協会のホームページでPDFファイルを公開しておりますので、ダウンロードしてご覧いただければ幸いです。（ホームページ http://www.nspa.or.jp/）

体裁（冊子版）：A4判四八ページ
目次：
理事長挨拶
この一〇年間の主な取り組み
著作権問題への取り組み
消費税問題への取り組み
一般社団法人移行への取り組み
特別寄稿　自然科学書分野における電子配信の歩み
六〇周年以後の行事について
役員名簿
会員名簿

第六六期第三回会員集会・懇親会のご報告

去る一月一九日（木）、一二時から日本出版クラブ会館にて第六六期第三回会員集会・懇親会を開催しましたのでご報告申し上げます。

従来、会員集会は理事長による開会の辞をもってスタートしますが、今回は金原理事長がＪＲＲＣ（日本複写権センター）運営委員会への出席を優先せざるを得ない事態が発生したため、会員集会の次第を変更し、金原理事長による年頭所感は専門委員会報告の後としました。

各専門委員会の報告が終わったところで、理事長が登壇し年頭所感を述べました。その概要をお伝えいたします。

冒頭、昨年実施した創立七〇周年式典、懇親会が盛大に開催できたことについて、会員各位のご協力に対する御礼の言葉がありました。さらに、当協会は歴史を重ね、創立八〇周年、九〇周年に向け、実りある活動を展開していきたいとの抱負をいただきました。

続いて、本日出席を優先せざるを得なかったＪＲＲＣの運営委員会について触れたあと、教育の情報化、つまり教育目的における著作物の電子化利用に関する権利制限に話題が移りました。さらに、現在審議中の法案（柔軟な利用に対する権利制限）についての概要説明、今後の方針として、授業における著作物の異時送信を可能とする法案について言及しました。この問題では利用できる授業の範囲を逸脱しないよう、定義づけをまとめるための小委員会を作って文化庁の審議に備えたいとの方針を述べました。これは、教育利用における制限規程の範囲拡大のさらなる可能性を防ぐため、我々権利者側が明確な定義をつくっておく必要があるとの趣旨でした。ＪＲＲＣとの関係については、会員に対し会報等でも広報しているとおり、再委託契約を二〇一七年三月末で解除し、秋頃には退会する予定であることに触れました。今後ＪＲＲＣとは合同のポータルサイトなど一定の連携は検討していくとのことでした。

続く新年懇親会は、金原理事長の挨拶の後、後藤顧問による乾杯に移りました。後藤顧問からは、酉年にちなみ「酉」という字の意味、先のことを考えること、計画性の重要さについての講話をいただいた後、乾杯のご発声をいただきました。

（総務委員長　飯塚尚彦）

■第六六期理事会・委員会開催一覧
（二〇一七年一月～三月）

●理事会
・一月一九日（木）／一〇時三〇分～一一時三〇分　日本出版クラブ会館
・三月一六日（木）／一五時～一六時四五分　日本出版クラブ会館

●専門委員会・特別委員会
・一月一六日（月）販売・出展委員会自然科学書フェア小委員会／一六時～一七時　日本出版クラブ会館
・三月七日（火）選挙管理委員会／一三時三〇分～一四時三〇分　協会事務所
・三月三〇日（木）広報委員会／一五時～一七時二〇分　裳華房

■事務局だより
〈代表者の変更〉
●一般財団法人 東京大学出版会
旧代表者：古田元夫　新代表者：吉見俊哉

編集後記

「機械学習」や「ディープラーニング」というキーワードを、書店はもちろん、さまざまなメディアで目にするようになりました。恥ずかしながら、私がこれらのキーワードをきちんと認識したのはだいぶ遅く、そのきっかけも〝将棋〟からでした。

近年、ボードゲームの世界においては「人類 vs コンピューター」の構図で、数々の名勝負が繰り広げられています。古くはチェスの世界で、最近では囲碁の人工知能ソフトAlphaGo の話題が大きく取り上げられました。将棋でも、プロ棋士とコンピューター将棋ソフトとの対局（電王戦）が（ルールなどはその都度変更されつつも）行われています。たかが将棋と侮るなかれ、この対局は普段将棋をまったく指さない私をも強く惹きつける内容で、年々飛躍的に強くなるソフトに対してプロ棋士がプライドを賭けて臨む姿には、心を打たれます。残念ながらこの取り組みは今年五月二〇日の対局で最後となるようですが、果たしてどんなドラマが観られるのか、今から楽しみです。

（N・S）